



# 碧南ロータリークラブ週報

第2489回例会 平成22年2月17日(水)

● 会長 鈴木 並生 ● 幹事 長田 豊治 ● 会場監督 (SAA) 新美 真司

■ 例会日 毎週水曜日 12:30

■ 例会場 碧南商工会議所ホール

■ 事務局 碧南商工会議所内

〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町90

TEL<0566>41-1100 FAX<0566>48-1100

ホームページ: <http://www.hekinan-rc.jp/>

E-mail: [info@hekinan-rc.jp](mailto:info@hekinan-rc.jp)

■ 会報委員 岡本明弘・新美雅浩・大澤明敬・西脇博正



## ● 斉 唱

ロータリーソング「今日も楽し」

## ● 本日のメニュー

和風弁当 大正館

## ● 本日のお客様

中本 邦治 氏



中本 邦治 氏



第4回米山功労者マルチプル 杉浦 晴彦君

## 感謝状贈呈

第4回米山功労者マルチプル 杉浦 晴彦 君

## 会長挨拶

気候の変動が大変激しいような気がしております。昔から三寒四温といまして暖くなったり寒くなったりしながら桜の咲く季節がやってきます。この時期は風邪などをひかないようにお身体には十分気を付けて頂きますようお願い致します。

さて先週の例会で2月はロータリー世界理解月間であり、国際ロータリーは1905年の2月23日創立し、この日を創立記念日としている話をしました。碧南ロータリークラブの第1回の例会は昭和34年4月22

日であります。そして、本日の例会が2489回で、あと11回で2500回の記念例会となります。この記念すべき例会を、どのように開催するかを役員で相談しております。通常の例会とは異なった記念例会としたいと思います。正式に決まりましたら会員の皆さんにお知らせ致します。第1回の例会がどのようなものであったか。当時を知るのはチャーターメンバーの山中寛三先生しかみえません。51年目を迎えるクラブとして、チャーターメンバーが例会に出席して頂けるのは大変ありがたいことだと思います。我々の宝であります。これからもお元気で出席して頂きますようお願い致します。

もう少しで2500回の記念すべき例会を迎えるということをお伝えしまして挨拶とします。

## 幹事報告

- 例会変更等は別紙幹事報告書の通りです。
- 先週皆様にご協力頂きましたハイチ地震義援金が31,590円集まりました。地区を通しまして寄付をさせていただきます。



鈴木並生会長



長田豊治幹事

- ・4月10日の家族会案内をFAXで連絡しました。多数のご参加をお願い致します。
- ・メールボックスに次年度の組織表と地区協議会の案内を入れておきました。

## 副 幹 事 報 告

- ・次年度地区協議会が4月18日に開催されます。出席義務の皆さんは、ご出席お願い致します。懇親会も予定しておりますので宜しくお願い致します。



新美宗和副幹事

## 委 員 会 報 告

### 〈出席奨励委員会〉

総会員数74名(内出席免除者14名の内出席者9名)出席者62名

出席対象者 62/68名 出 席 率 91.18%

欠席者12名(病欠者1名) 前々回修正出席率 100%

### 〈ニコボックス委員会〉

※三週連続出席率100%の場合は記念品を差し上げます。

- 加藤 良邦君 去る2月13日、碧南市消防協会物故者法要に、石橋会員を始め関係各位の皆さん大変お世話になりました。
- 鶴田 光久君 本日の卓話担当、出席奨励委員会で講師の中本様を紹介して頂き、委員の榊原健さん、ありがとうございました。
- 榊原 健君 本日の卓話の講師をご紹介させていただきます。
- 藤関 孝典君 少し良いことがありました。
- 大竹 密貴君 2月13日、消防協会追弔会では会長様始め、多くの皆様に大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

## 卓 話

### 「サッカーにおける環境と組織論」中本 邦治氏

私は、日本リーグの日本鋼管でプレーをしました。代表歴は高校時代より各年代で日本代表を経験しソウルオリンピック予選でフル代表としてプレーをしました。引退後はJリーグには進まずNKKで営業をする傍らNHKでJリーグの解説等をするなどサッカーとの関わりをもちつつ現在も日本代表OBの一員として活動を行っています。



初めにサッカーというスポーツについてですが、サッカーは世界で最も人気のあるスポーツです。国際サッカー連盟であるFIFAへの加盟国は207カ国になります。ちなみにランキングのトップはスペインで、ブラジル、ドイツと続き日本は40位となっています。何故、サッカーがこれほど親しまれているかは様々な側面はありますが、一つには世界の多数が貧しい国という現実から、どこでも誰でも遊べるスポーツであるということ。また、成功すればヨーロッパのクラブへの入団も可能で巨額の富を得ることができるからではなかと思えます。

#### 1. サッカーにおける環境とは

会社でも働く環境を整えれば社員のモチベーションも上がり、結果的には仕事に前向きに取り組むことにより生産効率および実績も上がるグッドスパイラルが期待できます。サッカーでも色々な視点から環境が与える影響があります。

##### (1) 国(民族性・生活環境)の違い

ワールドカップでも見られるように、国によってプレーのスタイルは随分と違います。日本人は、まじめな性格で規律を守り戦術にも従順に従うことから組織力を活かしたサッカー

が得意であります。これはフィジカル的に劣る部分をカバーするために不可欠なスタイルであります。それに対しまして、ブラジルは個人技重視の面が多く、これは育った環境から良いグラウンドが少なくパスよりもドリブルの方が有効であるという事と、性格的にラテン系特有の明るさ、サッカーを楽しむという事があると思います。また、ドイツはフィジカル的に屈強で各ポジションにおける専門性がすこぶる強いです。これはマイスター制度を重視する国民性から来るのかもしれませんが。

## (2) ピッチの環境

ピッチの状態の違いはプレースタイルに大きく影響します。ヨーロッパでは芝の状態が良くベントグリーンのように整った環境からドリブルよりも効率の良いパス重視のサッカーが主流です。反対に、南米はピッチ状態の良いところは少なく芝もごついことからドリブルを重視したサッカーを得意とします。一例として、日本で行われているチーム世界一決定戦の「トヨタカップ」でみると、1981年から日本での一発勝負になりましたが、最初の5年間は全て南米チームが勝っています。実力的にはヨーロッパが格上ですが、モチベーションの差と、ピッチの問題からです。トヨタカップが行われる12月の国立競技場は、ラグビーなどが使った後でピッチがガタガタの状態でした。必然的にパスを多用するヨーロッパのチームはミスパスが増えゲームをコントロールできなかった。反対に南米のチームはこれらに慣れていてドリブル主体なのでピッチ状態が悪くてもヨーロッパチームほど影響されない。そういう中で、ヨーロッパからクレームがつき第6回大会からは試合前に芝の手入れをすることとなり、結果的にはヨーロッパのチームの勝率が上がっていったという現実がありました。

## (3) 指導者の育成環境

名選手名監督にあらず。選手としての能力と指導者としての能力は必ずしも比例はしません。サッカー界では諸外国に沿ってコーチのライセンス制度を導入しています。それまで選手を引退した後はそのままコーチ・監督と自動的に着任していましたが、これでは良い選手は育ちません。選手がプロなら指導者もプロになる必要があります。指導者のライセンスにはD, C, A, S級とあり、S級を持っていないとJリーグの監督にはなれません。このライセンスはサッカーの技術、戦術だけではなく日本体育協会のライセンスも取得しなければいけません。これは、運動生理学、栄養学、スポーツ医学、スポーツ社会学等も履修することになり、このライセンスを取得すればサッカーだけではなくどのスポーツの指導者もできます。これは、現在地域ごとに盛んに設立されている「地域型総合スポーツクラブ」でも活かされています。

## 2. サッカーにおける組織論

会社における組織のあり方は、適材適所の人事管理およびその専門性を発揮させることに加えそれを融合させることがチームワークとなり最大限の力を発揮させることができます。

### (1) チームスポーツとしての組織論

チームスポーツはそれぞれの個性を持った選手が集まった集団です。持っている個性を損なわない範囲でプレーをしていくことが大事です。チームとは、ただ助け合うためだけのものではありません。各選手が、チームのために自分の持てる力を最大限発揮することで初めて成り立つものです。また、ポジションによって果たす役割も違ってきます。極端に言えば自分は目立つことなく、自己犠牲を覚悟してプレーをしていかなければなりません。例えば、日本代表では監督が全てのチームの選手をチョイスできるため、監督が代われれば選手も半数くらい交代するというのは日常茶飯事です。その傾向としてはその監督が以前指揮を取っていたチームから多くチョイスするというのはどの世界でも共通するのではな

いでしょうか。確かに、選手個々のプレー・性格を把握できているし、自分の考えるサッカーを既に理解しているというメリットもあります。次に、日本サッカーに貢献した人としてジーコをあげることができます。ジーコは世界のトッププレーヤーとして活躍したのち日本の住友金属に入団しJリーグ開幕からアントラーズの監督を務めました。この時、チームに最も適した選手を招聘し成功を収めました。1人は抜群の視野とテクニックをもったビスマルク、日本人にはない得点力を持ったアルシンドを起用しました。弱小チームを一気にトップチームに引き上げ、その後も現役ブラジル代表のジョルジーニョ、レオナルドを入団させ常勝チームへの確固たる地位を築きました。これらができたのもジーコの功績です。これまで、日本には坂を下った選手しか来ませんでした。ジーコが来たことにより現役バリバリの選手も遠慮なく日本へくることができ、結果的にはJリーグ・日本代表のレベルアップに貢献しました。ここでも適材適所(組織力)の大事さが見えます。

## (2) パートナーについて

自分のパフォーマンスをより引き出すには信頼できるパートナーが欠かせません。実例として「キングカズ」こと三浦一良は、高校のとき単身ブラジルに渡り名門サントスでレギュラーを獲得しました。その後、21歳で帰国し日本リーグの読売クラブに鳴り物入りで入団しました。当時の日本のサッカーレベルは決して高いものではなかったので三浦はスターとして期待されましたがチームメイトとうまくいかず孤立したプレーが多く活躍の機会はありませんでした。ただ、本人の性格は至極まじめで、2年目からは周りにも馴染み周知の活躍を見せるようになりました。また、Jリーグが始まり、三浦一良は人気実力共トップを張る中で、イタリアセリエAのジェノバに入団しました。当地でも期待され日本のマスコミも大挙しセンセーショナルを巻き起こしましたが結果は大きな活躍もできず短年で日本に帰国することになりました。その後Jリーグで世界のトッププレーヤーが活躍するようになり、海外でも認知されだし日本代表もフランスワールドカップへ出場するなどした後、中田(英)がイタリアセリエAのペルージャへ入団しました。その後もローマ、フィオレンティーナ等で活躍したことは記憶に新しいと思います。では何故、カズは成功せず中田は成功できたのか。そこには色々な要素があります。一つには、カズが入団した当時は日本はまだワールドカップにも出場したこともなく現地では日本のサッカー自体の認知度が低かったこと。そのわりにはマスコミが騒ぎチームメイトからやっかまれたためにパートナーができなかったこと。試合中にもカズが欲しいタイミングでパスが受けられず逆に苦しい状況のときにパスをよこすなど、本来の力を発揮する場面がなく評価を落としていきました。これは、カズのポジションがフォワードということから、どちらかといえばパスを受ける立場にあるということもあります。それに対して中田(英)の場合は、タイミング的にも、ワールドカップ出場を果たした実績とJリーグ自体の認知度も上がったこと。また、ポジション的にもミッドフィルダーということでボールを触る頻度も多く自分がゲームを作れるという立場にあることが大きかったかと思います。

## (3) チーム貢献と組織論

チームスポーツは企業の成長過程と同じと考えられます。個人は自分の磨いてきたスキルを武器にチーム内での競争等により更に成長させ、合わせてそのチーム文化に融合させていくことによりチーム全体のレベルをアップさせていきます。監督・コーチはそれをバックアップしながら適材適所に選手を当てはめていくことにより、より強力な集団に作り上げていきます。結論的には、チームスポーツ(企業)は1人でやるものではないため、我慢すること、融合する努力をすること、それを常に意識しながら個人の個性とチームの一員としての自分を意識しながらバランスを保っていくことが重要であると考えます。

今年のワールドカップ南アフリカ大会では、日本サッカーがどういう結果が残せるか期待したいところです。以上で私の話を終わりたいと思います。長い時間ご静聴ありがとうございました。

**次回例会案内 平成22年3月3日(水)**  
**卓話「藤井達吉翁、その人と思想 - 今、なぜ達吉翁か」**  
碧南市市史資料調査室 浅井久夫氏